

～県内企業においてIT外国人材が活躍するために～

令和6年度地域政策研究センター 地域協働研究【ステージⅠ】採択課題

課題名：IT外国人材が活躍する環境整備に関する研究

研究代表者：社会福祉学部 細越久美子

課題提案者：株式会社ヒロキャリアスタッフ

研究メンバー：Prima Oky Dicky Ardiansyah（ソフトウェア情報学部）

技術キーワード：DX化、IT外国人材、職場適応

▼研究の概要（背景・目標）

本県では、少子高齢化が顕著となり、深刻な労働力不足が懸念されている。このような状況下においては、DX（デジタルトランスフォーメーション）による業務の自動化・効率化が必要不可欠である。

本研究では、会社Hが招聘するIT外国人材をモデルケースとし、県内企業や団体においてIT外国人材が活躍できる環境の整備に向けた課題を明らかにすることを目的とする。

▼研究の内容（方法・経過）

(1)受け入れ企業を対象とした調査：会社Hの社長X氏およびIT外国人材担当者Y氏に、外国人材（A氏、B氏）の基本情報についてヒアリングを実施。Y氏に対しては、外国人材の入国1か月後、11か月後にヒアリング調査を実施。

(2)IT外国人材を対象とした調査：IT外国人材A氏・B氏（フィリピン出身、20代男性）に対面・メールでの面接調査を複数回実施。また、適応状況の測定ため、入国1～2か月後、5～6か月後、11～12か月後において、社会文化的適応尺（SCAS-R, Wilson, 2013）を用いた調査を実施。

▼研究の成果（結論・考察）

(1)会社側からみた外国人材の受け入れ状況

生活基盤はメンターを中心に手厚い支援がなされていた。また、日本語指導の時間を設けたり、週1回フィリピン人通訳者が来社し、支援行っていた。会社HはIT企業ではないため、IT人材の業務内容は標準化されておらず、話し合いながら業務を模索している状態だった。対人関係については、来日直後はメンターや日本語指導担当との関わりが中心であったが、11か月後には日本語での簡単な会話もでき、徐々に業務にも自発的に取り組むようになった。

(2)外国人材からみた日本での職業生活と適応

来日後の生活について、B氏は「期待通り、むしろ期待以上だった」と回答。一方でA氏は、「規律正しさや技術の高さは想像通りだったが、母国から遠く離れた異文化の中で生活することがこれほど大変だとは思わなかった」と述べており、両者の受け止め方には違いが見られた。日本人社員は親切で、手厚い支援や配慮には感謝している。しかし言葉の壁のために、どうしても円滑なコミュニケーションが難しいと感じることがある。

Figure1 IT外国人材（A氏、B氏）の適応度（SCAS-R）

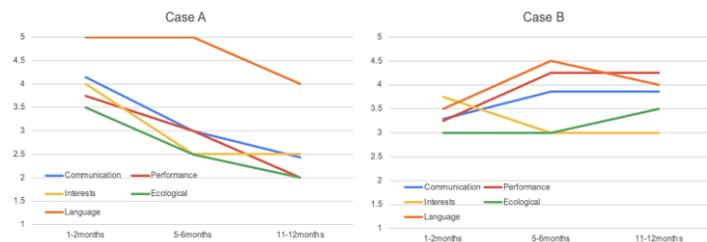


Figure1からも、B氏は少しずつ日本での生活や職場環境に適応してきている様子がうかがえる。一方で、A氏の適応状況は全体的に低下傾向にあった。来日後数か月間に感じた孤独感は大きく、家族と離れて暮らすことによるホームシックに加え、日本語で自分の考えを十分に伝えられないことへのもどかしさから、強い孤独を感じていたという。A氏はB氏と比べて控えめな性格であること、ITスキルを職場で十分に発揮できていないことも、職場での「居場所のなさ」につながっていると考えられる。

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

会社側が外国人材に対して非常に手厚い支援を行っていることが確認された。一方で、業務内容や職務範囲が曖昧であることで、仕事への興味・関心が低下していた。今回の受け入れ企業はIT企業ではなかったため、技術面における具体的な指示や支援が困難であったことが課題として浮かび上がった。また、社内でのコミュニケーションがほぼ日本語であるため、一定程度の日本語能力を備えた状態で採用するか、採用後に体系的な日本語学習の機会を提供する必要性が示された。今後はこれらの知見をもとに、外国人材がより活躍できる環境整備や採用手続きについて協議・検討を重ね、継続的に検証することにより、外国人材のキャリア発達と企業の発展との関連性を明らかにすることが可能になると考えられる。